

# 文藝日本

50円



座談会  
私小説と反俗精神

2

昭和三十年一月二十五日 印刷納本  
昭和二十八年三月十二日 第三種郵便物認可  
昭和三十年二月一日 發行  
昭和二十八年十月二十八日  
(毎月一回一日發行) 第三卷第二号  
日本国鉄特別扱承認雑誌第二六八〇号

文藝日本

昭和三十年二月号

第三卷第二号

定価五〇円

製造品目

人絹バルブ・製紙バルブ・クラフト紙

其他一般洋紙・酒精

國策バルブ

取締役社長 島村芳三

本社 東京都千代田区有楽町一丁目八番地  
電話銀座(59)0121 (10)0131 (5)

本店 大阪・札幌  
出張所 北見  
工場 旭川・苫小牧勇弘

ところが、この「糸女覚書」は全然ひどい。芥川らしくない粗暴な仕事をしているのである。「霜女覚書」以外に、何を讀んだかおそらく何も読まず、何も調べないで、いきなり（なにか激発的な感情に動かされて）筆をとつたのではなからうか。

たとえば、ガラシャ夫人の信仰について、（これが根本問題なのだ）芥川はほとんどなにも知っていないのである。芥川は、まるでこの頃の邪教に凝つた妻君でもきおろすような態度で、ガラシャの信仰ぶりを、罵倒したり、冷かししたりしているのだ。これが実にふしぎだ。

それから、歴史の無知をバクロしている事柄がいくつもある。芥川は砲術家の稲富伊賀を単純な家臣だと思つてゐる。また小笠原少齋や河北石見がガラシャに自殺をすすめたことを攻撃して、「老臣が馬鹿だから、こんな悲劇が起つたのだ、奥方を田辺の城に落せばいいのにその知恵が出ないのだから呆れたものだ、といつてゐるが、ああいう緊迫した状況の下で、どうして大阪城の総構から外に出られるか。加藤清正の内室のような離れわざでもやらないかぎり脱出できるものではない。

子息与一郎の内室が、一緒に死ぬ約束をしながら逃亡してしまつたのは事実だが、ガラシャがそれを憤慨して「平大名の娘」と罵るのはたいへんなまちがいである。この人は平大名どころか、加賀百万石前田利長の姫君だ。一事が万事、全編そうした誤りや感ちがいの罵倒が充滿してゐる。

歴史知識のない読者は、この小説を「ある日の大石内蔵助」などと同類項の偶像破壊小説だとかんがえてゐるらしいが、これは似てもいつかぬものである。

一向にそれをきいてみることをさへしないで来たのだが。

これもまた前置としては、はなはだまづいことだが、この文章を書くため、はじめて龍之介の年譜を見て、私は私自身が、龍之介よりはるかに長生きしたことに気がつき、はなはだしく感慨を催してゐる。彼の死が一九二七年でそのとき三十六歳だつたことなど、誰しも承知のことだらうのに、私はそのことさへこの二十年ついぞ思ひ返すこともなかつたのである。ついでにもう少し饒舌を許してもらへるなら、私自身の三十六歳は、昭和二十一年終戦の翌年で、私は中華民国の天津にゐて毎日、自殺を思つてゐた。この未遂だつた自殺の理由は、龍之介とはもちろんちがつたらうが、これの遂行には中々の困難が伴ふことを証明するかのやうに、私は生きて日本に還つて来て、さうして今だに生きながらへてゐるのである。

をめぐり生きながらへたせいばかりでもあるまいが、私にとつては龍之介の自殺は、今こそ責めたいやうな気がする。何が原因だつたか、私には今もわからないのだが、たとへそれが何であつたとしても自殺はよくなかつたと思ふ。「老醜」といふ語があつて、生きてゐたら、或ひは龍之介は、非常に聰明な人だつたから、自らそれを意識し恥ぢつゝも、その老醜の典型になつてゐたのではないかと思ふ。しかしそれでも生きてゐてもらひたかつた。それが私のせいといつばいの情のこもつたはなむけである。

この間、今東光氏の講演で、これもはじめて知つてびっくりしたのだが——かういふ無智の告白は、老醜にならねば中々云へることでないのを、このごろ私は知り出したのである——谷崎潤一郎氏は大変な秀才であつた由である。同級の博士や大臣が足もとにもよれないやうな大秀才だつた由である。私なぞ、鈍なればこそ文学が好

糸女の一人称の形式をとつたことは、のびきならぬ立場に作者を置いてゐる。このことをかんがえなければならぬ。作者自身を糸女と別な立場において、自由に糸女を批判するのでなかつたら、糸女のガラシャ評は、作者自身のガラシャ評となる。実際にそうなつてゐる。そしてその批評は、一点同情の余地もない稀代の悪女として、ガラシャを徹底的に筆誅してゐるのだ。これはただ事でないという感じを与える。

この謎を解く人は、別に有るだらうと思つてから、ここでは深く詮索をしないでおくが一言感したまをいへば、芥川はガラシャ夫人の名を借りて、彼の身辺のだれかに対する日頃の憤懣をぶちまけたのではなからうか。もしそうだとすると文名一世を圧した芥川も、まことに気の毒な人であると思う。（自由ヶ丘にて十一月）

## わが龍之介論

田中克己

芥川龍之介の自殺が報ぜられたとき、私はまだ中学生だつた。そしてその翌年、高等学校へ入学して知合となつた保田与重郎は、私に添へたと、私は記憶してゐる。今でもあの頃の私達のやうに、高橋生乃至年輩のほど同じく二十歳まへの大学生は、龍之介をむさぼるやうに読むのだらうか。私はいまその年頃の娘たちを教へながら、

きになつたと思つてゐたが、この話をきいたので結構、文学に対する自信も永久に失つてしまふことが出来た。それはともかく龍之介も、これに劣らぬ秀才だつたにちがひない。しかしその秀才ぶりの、なんと哀れなことか。

「鼻」「羅生門」などの一聯の出世作が、私どもいま岩波文庫その他によつて、手軽に「今昔物語」などをよむことの出来るやうになつた者にとつて、なんと薄つべらな作品に見えだしたることか。しかも私たちはかうしたものから、龍之介を愛し出したのである。薄つべらだといふのはこれらを読んだころの自分への感慨にすぎないのだが、「羅生門」や「鼻」が雑誌にのり、激賞されたのは、作者の二十四五才のときだつたのである。薄つべらだつたといはれても、決して恥ではあるまいと思ふ。「芋粥」「手巾」も同じくこの二十五才の年の作で、この年末、これらを激賞した漱石は死ぬ。

そしてこの年が実は大正五年で、第一次世界大戦の最中、翌年がロシアに革命の起つた年である。私が不用意に、といふよりは至つて簡単に「薄つべら」なぞといつた原因は、たぶんこの辺にあるだらう。もとよりこの戦争では、第二次世界大戦とちがつて、わが日本は楽々とした役目を負はされてゐた。連合国に参加しながらも、おほむね傍観の態度をとり得、経済的には第三者としての軍需景気が巷にまであふれた。しかし前にもいつた通り、龍之介は当時の国内一流の秀才だつたのである。戦争、景気、隣国の革命——それらすべてに對して、この秀才はどんな態度を示したか。これは芥川文学にとつての致命傷だつたばかりでなく、このインテリにさへ戦争といふ大事件が、本当の意味でわからなかつたといふことが、のちの日本に致命傷になつたのだと、今にして私は思ふ。

「將軍」——反戦文学といへばいへるであらう——が書かれるのは、すでに大家の地位が定まつた三十一才の時である。社会批判や風刺の筆のあとには、さすがに、彼自身の立場はいつも不明である。いな今こそ私には云へる、秀才としての立場である。世間を、大衆を愚劣とあはれむこの秀才の眼の色が、若かつた私には大変な魅力だつただけ、今となつては、くそいま／＼しくてならない。秀才のほかには、都会人——先祖代々の江戸っ子、としての誇らしさもあらう。すべて誇つてはならないものを、反省なしに誇つてゐるところに、その魅力があつたとしたら、作者自身の反省の暁は、また読者自身の反省の暁は、答はいはずとも明らかであらう。

くりかへしていふが、龍之介は聰明だつた。それはかういふ風にあられる。柳島の愛聖館の掲示板をふと見上げて、「神様はこんなにたくさん人間をお造りになりました。ですから人間を愛していらつしやいます」といふ文字を見て、彼は微笑する。本所西園は、この微笑を、苦笑だと解釈する。それからまた私は、このふと見るところにひつかゝらないわけにはゆかない。おろかな私なら、掲示はかならず見る。そして苦笑や微笑のかはりに、大笑するか、怒るのである。人に怒るはもとより、神に対してさへも怒るであらう。しかし彼は微笑して散策の歩みをつづけるのである。この態度を例証する必要があるまい。故人の友だつた佐藤春夫先生の紹介によつて知つたことであるが、彼みづからがかういふ意味のことを云つてゐる田である。「人々に恥を曝すために裸になつてそれによつて喝采されるなどは真平だ」と、喝采されるのをいやがるのはよい。しかし裸になつて恥を曝してゐる他人を冷笑するのは、惨酷なことではあるまいか。私はむしろ愛聖館の掲示を書いた人を愛する。

しも不幸といへないで、何であらう。顧みて他をいふといふ態度がこの道筋では教へられる。それが賢明なのである。他のあらゆる動きに反撥を感じるが、みづからはこれを感じさせないやうにする。非常に女性的、消極的である。誤解をさけるためにいふが、私はいま「秀才」の定義をしてゐるのであつて、龍之介がかならずしもさうだつたといふのではない。しかしこの型にびつたり当てはまらなかつたとしても、これと全然ことなつてゐたらふしぎなのである。こゝから模範的な官僚、立身出世の亀鑑は出て来ても、文学は生れない。しかも龍之介は文学をえらんだ。さうしてたちまち名声を勝ち得た。どうしたのだらう。私の定義のどこがちがつてゐたのだらう。

龍之介が直哉の前に膝を屈したのは、周知のことだが、彼は春夫にも頭を垂れねばならない。ふたりとも龍之介よりずつとわがまゝなのである。聰明とか秀才とか、さういふものは問題にしてゐないのである。この語がなぜまた芸術に必要か。それなればこそ反対に春夫はかう忠告してゐる。「文学の事業は必ずしも完成したものをつくるのではなく、我々の魂を伝へようとするにあるならば、……我々の欠点我々の失敗によつて亦……我々自身を表現し得るわけなのである云々」(芥川龍之介を哭す)しかしこの忠告も龍之介にはわからなかつたらしい。「佐藤春夫氏の言葉を引けば『文章はしやべるやうに書け』と云ふことである。僕は実際この文章をしやべるやうに書いて行つた。が、いくら書いて行つても、しやべりたいことは尽きさうもない云々」(文芸的な、余りに文芸的な)これが上巻の文章への答弁であつて、それがすでに自殺の年だつたといふことが、私をとりわけ悲しませる。到頭この作家は好きなこ

たぶん彼はおろかで、本気でさう考へたのであらう、文脈もそれを証明してゐるやうに思ふ。そしておろかなながらも、なんと愛情にみちゆる愚かさの肯定をひき出し、侮蔑し、批判するのは惨酷なことであらう。しかし私自身が、さうした立場に立つたことはなかつたらうか。それはさておき、愛聖館の掲示の点で私の感じた、インテリの冷たさが芥川文学の真髓だつたことはいなめまい。彼自身に愛情が不足だつたとは、絶対にいはない。しかしその表現は、実に少い。皆無といつてもいひすぎではあるまい。彼が師と仰いだ漱石はともかく、知的な作家と思つた鷗外に、この頃あたゝかさのあふれてゐるにおどろく私だが、鷗外の作品、すくなくともその翻訳物に、多大な感化を受けたと認められる龍之介に、あたゝかい愛情の表現が見られないのはどうしたわけだらう。

「汝と住むべくは下町の、昼は寂しき露路の奥、古簾垂れたる窓の上に、鉢の雁皮も花咲かむ。例外的に情にみちたこれらの詩に作者は「戯れに」と題することを忘れない。なぜだらう、なぜだらう。卑怯か。いな知羞だ、これこそインテリのとるべき態度だと彼はいふのだらう。

明治以来とりいれられた西洋の学問に、徳川時代もしくはそれ以前からの古典的な伝統を加へた、複雑なコムプレックス、これが大正のインテリである。なかんづくその代表的なものが江戸っ子出身で、これが府立一中、一高、東大と進めば完璧である。龍之介はこの資格では、中学が三中だつたといふ点を欠いてゐるのみである。彼が縛られた、型にはまつた人間にならうと、当然であらう。もつとも聰明な生れつきが、偶然この型にはめこまれたのである。これを

とが書けないで、他人ばかりを意識して書いたまゝに終つたのである。しかし私にはさういふところはないだらうか。青年時代に私をして芥川文学を愛読せしめた理由は何だつたらうか。顧みて反省すれば私たちは龍之介につゞかんことを理想としたのである。皮肉や風刺さへも、龍之介がハインを模範としたごとく私たちはまた龍之介に模範を置いた。そして亜流がいつの場合にも、お師匠より劣つてゐる例にもれず、なほ一層みじめであつたことはいふを待たない。しかも私たちは生きのこつてゐる。その中から本物の文学が生れるのはなか／＼むづかしいと思ふが、もはや時代は少々の知恵や聰明さでは、何ともならないところへ来てゐるのだ。それだけは私たちが確信できてゐる。こゝから生れるのは、おろかな、しかし本當の文学ではないだらうか。芥川文学をよみかへして、私はさう思はざるを得なかつた。

……新刊紹介……

「アジア・過去と現在」近衛霞山公五十年祭記念論集  
本書は、内外危急の現状を打開して真にアジア民族の平和と発展を図る根本理念においては、日本も霞山公の意見を離るゝものではないとの見地から、今日もアジア民族の最も根本的な問題について各界權威の論文を集録したものである。目次の一部

- 世界と東アジア……………和田 清
- 東洋的社会……………小竹文夫
- 二つの世界とアジア……………高山岩男
- 大東亞戦争の世界史的意義……………矢部貞治

定價三二〇円  
財團 霞山俱樂部  
法人 東京千代田区西神田二ノ二

○昭和三十年の正月もはや半をすぎた。この正月、東京は連日好天に恵まれて、いかにも春遠からぬを思はせる陽気であった。国際情勢もこのころ不気味な緊迫をゆるめてゐるが、決して危機を脱したといふのではない。

世界およびアジアに於ける日本の位置は、漸次重量を加へて来るとともにいよいよ微妙なものがある。日本及び日本人は敗戦後十年、生きることで精一杯だといふことで何ごも許されて来た観があるが、もはやさうした儉安は許さないであらう。日本はその運命をかけて将来の針路を決すべく強られてゐる。しかも日本の運命はふかくアジアの運命に繫つてゐることを思ふべきである。

○新刊紹介欄に紹介した「アジア・過去と現在」には和田清氏「世界史と東アジア」高山岩男氏「二つの世界とアジア」など何題すべき言説が收められてゐる。「現代の文明を開拓した心は同時に現代文明を破壊に導く心と同じ心なのである。この事情を慎慮するとき、アジアの諸民族は単に華やかな文明の表に眩惑されず文明の心に想を致して、新たな文明の心を切り開くことに努力を集中しなければならぬであらう」とは高山氏の結語の一節である。

○座談会「私小説と反俗精神」は私小説といはず戦後のわが文学の通弊を衝いて、今日の文学者がふかく思量すべき問題を提起してゐる。

特集「芥川龍之介研究」——佐藤先生の芥川龍之介論は、大正文学の代表者として芥川を論究したもので、大正文学の劃切な解説であるばかりでなく、芥川文学の性格を解析して余蘊がない。村雨二郎氏ならびに田中克己氏の評論もそれぞれに独自の考察である。併せて味読されたい。

○前号の沖野岩三郎氏の「回想の人々」は非常に好評で、第二回の原稿もすでに、いたゞいてあるのだが、紙数の都合で残念ながら次号へ割愛した。同氏ならびに読者諸賢御寛恕を乞ふ次第である。

○「もうぞんかつら」の野守康子君は中谷君の推挙による新人である。毎月小説の投稿は多いがなかなか良い作品がない。猶ふるつて自信あるものを寄せられたい。枚数は四十枚前後のものが適当である。

○本誌も再刊三年、今年はさらに内容を刷新して各方面からの激励と期待に応へたいと思つてゐる。編集部でもいろいろと意見も出てゐるので、順次紙面の上に具体化して生彩を加へてゆくつもりである。

○直接購読も号を追うてふへてゐて心強いが、更に直接購読による支持の倍加することを希望してゐる。何卒知人の方々におすゝめ願ひたい。(大鹿)

| 編集委員 |      |
|------|------|
| 佐藤春夫 | 浅野晃  |
| 外村繁  | 柳潤   |
| 中村孝  | 水谷雄  |
| 大野吉卓 | 牧野清  |
| 水野吉卓 | 野谷清  |
| 中野吉卓 | 水野吉卓 |
| 大野吉卓 | 野谷清  |

| 購読料 | 定価   |
|-----|------|
| 一年分 | 五〇円  |
| 半年分 | 三〇〇円 |
| 半年分 | 六〇〇円 |
| 郵税共 |      |

文芸日本 昭和三十年二月二十五日印刷  
昭和三十年二月一日発行

| 編集所                                  | 編集兼発行人 | 印刷所                   | 印刷人   | 発行所   |
|--------------------------------------|--------|-----------------------|-------|---|
| 東京都杉並區勤町三二八<br>文芸日本編集室<br>電話(39)一五六〇 | 大鹿卓    | 東京都荒川区尾久町二ノ四五四<br>精文堂 | 西村文一郎 | 東京都台東區西町六六<br>文芸日本社<br>電話(83)七〇二〇<br>振替東京一四六七二番 |

# 東洋レコード株式会社



フンスロ  
人絹イナ

社長 田代茂樹  
社長 喜久雄

本店 東京都中央区日本橋室町二丁目一番地  
本部 大阪市北区中ノ島三丁目五番地  
工場 滋賀・愛媛・瀬田・名古屋・愛知・山科・金津